

## 役者たちの

### 「打ち明け話」



公演パンフレットに掲載した出演メンバーの文章です。



## 奥村洋治

Yoji Okumura

## 運転

車の運転、ですかね依存といえよ。とにかく好きというレベルを超えてると思います。

「自分の劇団の大道具を積んだ大型トラックを運転して熊本市民会館につける」というのが上京して劇団活動を始めた頃の夢の一つだったことはよく口にします。「大型トラック」が「4トントラック」に、「熊本市民会館」が「熊本県立劇場」に変わって実現したときの道中は夢見心地でした。

そのとき以外にも東名・名神・中国道を何度も走りました。まるで、トラックの運転したいから芝居やってる、みたいな本末転倒ぶりです。旅公演がないときは、早く、早く運転したいという気持ちが高じて体がブルブル震える…大げさですが禁断症状が出るくらいです。あれ？ 依存は「車の運転」じゃなくて、「トラックの運転」ですか？

※『パラサイトパラダイス』パンフレットより  
〈私が依存しているモノ・コト・ヒト〉

## 普通に笑顔

阿佐ヶ谷駅の南側のロータリーから駅舎に向かう道は15mくらいの、言われてみると確かに、という程度のゆるーい上りになってます。その傾斜の真ん中あたりで、お買い物用三輪自転車に乗った白髪のちっちゃいおばあちゃんが、駅舎に向かって、つまり、上りの向きで止まってました。

いや、止まってない。おばあちゃんは力を入れてペダルを踏んで、30cm進むと力尽きて30cm下がる、を繰り返してました。踏み込むとき、顔を充血させて。下がる時、もうこのまま息絶えるような諦めの顔で。何回も。

「押しましようか?」と声かけました。パッと明るい笑顔が返ってきました。私も笑顔になりました。

※『死に顔ピース』パンフレットより  
〈私の笑顔の素〉

## 『自老不感症』からの脱却

自老不感症の老人が増えている。と思う。

自分が老いる、ということに気づかない。いつまでも若くありたいレベルを超えて、自分が老いることを自覚できない・認めない・言わせない、の「自認言拒否」の症状を示し、周囲の輦蹙を買う。果てはキレて暴言・暴力に至る。それは「老害」という現象として以前から口の端に上がっていたが、最近の研究でそれが病気からくるものとわかってきた。「現役100まで。人生150まで。」を50代に乗ってすぐ公言し始めた私は、この兆候が既にあったと思われる。つまり「自老不感症の若年化」の走りでもあったわけだ。

今回の芝居で私が演じる老人もきっと同じ病だ。確信している。だから親近感を覚える。生きてる限り必ず訪れる「古い」。認めれば幸せに世を去れる。

ちなみに「自老不感症」って、今私が思いつきで言ってるので、もし実際にあったら、それとは別物です。悪しからず。

※『ピーイング・アライブ』パンフレットより  
〈老後の夢〉

## 恥ずかしい

奥村ですがね。

地震・津波のあと原発事故があり、その後の右往左往を見聞きするにつ

け蘇るシーンがあります。原子力発電絡みの仕事をしている従兄と、兄と、私とで話をしている、兄は原子力発電に反対する立場だったので、従兄と激論になってました。

曰く、「人間の叡智を超えるものだから、一旦事故が起こったら取り返しがつかないことになる」。従兄曰く、「だからこそ人間の叡智を結集して、事故が起こらないよう万全の態勢でのぞんでいる」。この時私は、従兄の味方をしました。

「既に3分の1は原子力発電に頼っている。今の生活は電力なくして考えられない。人間の叡智を信じよう」

で、このザマです。兄に対してはもちろん、それより自分に対して恥ずかしくてたまりません。

※『イチエフ・プレイズ』パンフレットより  
〈「あの日」以降…〉

## 楽しくなったみたいだね

奥村ですがね。

あれは小5の頃でしょうか、体育の時間。

小学生の頃、短距離走は速いほうでクラス1、2を争ってて、そのライバルが「あきらしゃん」だったんですが、長距離になると全然かなわなくて。で。その小5の頃、急に「俺、速いんじゃない？」という気が起こって、なんか、真剣に走ったんです。そしたら3位になって。あきらしゃんにあと一歩ということになったんです。

「あきらしゃん」に対するライバル心は誰にも話したことなく、でも俺の心の中はメチャドキドキで。そして、そういう俺の心を知っていたかのような、その時の体育の谷崎先生？ 右山先生？ もう誰だったか忘れちゃいましたけど、先生から言われたのが、タイトルの言葉。

メチャうれしゅうございました。

※『誰も見たことのない場所2015』パンフレットより  
〈勇気づけられた言葉〉

## 仙人

仙人になりたいと思ってた若い頃、将来の家は熊本の阿蘇山の一角の洞穴の予定でした。

先日5枚刃のヒゲ剃りが初めて我が家に来ました。息子としばし話が盛り上がりました。「4枚刃よりきつとスルスルだよ」「刃がすぐ錆びるから風呂場

じゃなくて洗面所に置こうよ」「スーサー、もう買ってるから使ってみる?」「お前、用意いいなあ」「まあ俺は週に2回剃ればいーくらいだけどね」「え? そんなに伸びないの?」……「どうだった?」「すげえよ。スルスル。もはやヒゲ剃ってるというより石鹸で撫でてる感じだね」

いつのまにか仙人になる努力を怠っていた私は最近、自分のふがいなさに自分を責めていました。変節した自分が恥ずかしくもありました。でも基本、ヒゲを伸ばしている仙人には5枚刃の髭剃りの快感を知る機会はありません。洞穴に住んでいたら、この快感とは無縁です。だから、この家で良かったんだ。この家が好きだ!

※『海のとっぺん』パンフレットより  
〈私の家〉

## 「天才24死ぬ目」説の真偽

ボブ・ディラン24歳の時、死んでもおかしくない交通事故にあった。ジミ・ヘンドリックスは24歳の時、ヤクのやりすぎで嘔吐物を喉に詰まらせ窒息死した。

「天才は24で死ぬ目に遭う」。人生の師、「きんちゃん」(実兄)は厳かにそう言い放った。

「そうか。俺は24で死ぬ目に遭うんだ」。私は覚悟を決めた。

24の時、大失恋をし「俺の人生は終わった」と感じた。証明された。

……と信じてた。ら。違ってた。何が?

ディラン25、ジミヘン27だった。24は無関係。どころか、「天才27死」説が常識とも知った。

人生の師、きんちゃんが今回、芝居を観に来る。きんちゃんの勘違いか、俺の記憶違いか。毒舌を吐きつつお互いの正義を主張し合う、のか?

※『毒舌と正義』パンフレットより  
〈忘れられない先生〉

## 葛藤

火事がおこるかも、と水の入ったバケツ持って立ってる。だんだん腕が疲れてくる。何やってんの俺? 誰が火事が起こるって言った? いや、可能性ある以上、俺は必要なことは全部やる。火が見えたらすぐに水をかけるんだ。重い。バケツ。降ろしていい? いやダメ。すぐにかけないと手遅れになる。えーっ? ちょっとくらい大丈夫だよ。いや、その油断が命取りなんだ。だって、もう腕痛いくらいだから火事が起こってもバケツ持ち上げら

れないんじゃない？ でも火事が起きたら誰かが消さなきゃ大変なことになるんだから。だからそれがなんで俺？ 俺じゃなくていいじゃん？ そもそも、なぜ火事？ 地震は？ 老後は？

いろんな場面で私はいろいろ葛藤した挙句、結局何もしないことが多い。

何が起きても負けない「心」くらいですかね、日頃備えているのは。

※『流れゆく庭-あるいは方舟-』パンフレットより

〈私の備えていること〉

## 私の大切な？ 金魚？

母です。とシンプルな答えが出る前に、「金魚」を思い浮かべました。

「金魚鉢の金魚」です。でめきんとからんちゅうのような高級ブランドじゃなく、赤い色の鮎という感じのやつ。長いこと変えてない水は濁り、薄く緑色の苔がガラスの内側を覆っている。水の濁りはもちろん自分の、まさしく「金魚の糞」でもあり。

よくこんな閉鎖空間で生きてるなあ。ん？ こりゃ、大切な人のイメージじゃなく、自分の姿？

この金魚鉢は空き家にあり、つまり置き去りにされていて、でも、1週間に1回くらい「サチ」さんが餌やりに来てくれて、それはでも却って濁りを促進するので、ありがた迷惑で。

サチさん？ 母は「キミさん」だぞ。そう呼んだことはないけど。しかもありがた迷惑ってなんだ？ 失礼な。いずれにしろ「大切な人」をイメージし始めたら、自分の貧相な姿が浮かんできたちゅう、悲しい話。

※『息をひそめて-シリア革命の真実-』パンフレットより

〈私の大切な人〉

## 絞り痛

昔、いかに高い所から飛び降りることができるか、が流行した。俺の中でだけだった気もするが、神社のこま犬像からとか、神社の柵の上からとか、最高だったのは神社の石垣の上からの時で、この時はさすがに恐怖を感じた。

じゃ、やめりゃいいじゃん、とは思わなかった。飛んだ。着地した。ジーンと足全体に衝撃の余韻が。

そして、本当の恐怖がおとずれた。股間に保管してある二個の宝玉

が、下方に向け強く引っ張られるような痛みが。誰かが引きちぎろうとしているかのような、引き絞るような痛みが。しばらく動けなかった。そして、二個の宝玉が輝きを失うのではないかと、強烈な不安に駆られた。

失わなかった。

大人になって、飛び降りること自体が少なくなり、機会は減ったが、何かの拍子にダンッと着地したりするようなことがあると、あの絞り痛がくる。神社の神のお叱りだと思う。

※『恐怖が始まる』パンフレットより  
〈私の恐怖体験〉

## 入梅の日

電話取材してみました。「俺の生まれた日ってなんか覚えてる?」「アタが時はねえ、時の記念日ば過ぎたったい。6月11日だろ?」

当時洗濯機はなかったのでタライで洗濯するなど、いつものように炊事も含め、家事を一人で全部すませた夕方から陣痛が始まり、助産婦さんに来てもらい、自宅での自然分娩に備えたそうです。2歳になる兄は寝てしまい、父は家にはいたようですが、あまり母の記憶になく、きっと、酒でも飲んでいたんでしょう。6月10日。

「今日なら覚え安かたい。時の記念日だけん」。ところがなかなか産まれず、12時を回って夜中の出産になってしまいました。11日は「入梅の日」。覚え安さはありますが……。

夜が明けると梅雨どきなのに快晴だったそうです。

朝5時半頃の電話に「なんごつかい?」と驚いてはいましたが「もう起きとったたい。今、洗濯も終わったとこったい」。もちろん今は全自動洗濯機です。80になる母は元気でした。

※『産まれた理由』パンフレットより  
〈私の産まれた日〉

## 機能不全

私の中の小型原子力エンジンは、その圧倒的なエネルギー量をキープし続けています。ちよいと自慢です。なのになのに。近年、視力・体力などエンジン周辺の機能が著しく低下しています。そして、眠くなるのです。

睡魔と地頭には勝てぬ。地震・雷・火事・眠気。人はとやかく言いますが、眠気があると「とりあえず寝よう!」と思うのです。寝たが最後、そのまま

黄泉の国に旅立ちそうな深いところへ行くのです。

実は、「とりあえず寝よう」との闘いは数十年前から始まっています。連戦連敗。勝った試しがありません。私が演じる氷室さんは眠気に弱い、とかはないとは思いますが、気にして見てくだされば、あれ? と思える展開になっていると思います。いや寝てるとかじゃなく、氷室さんも体内小型原子力エンジンの機能を十分に発揮できないのです。なぜか? それが見どころなのです。

※『みんな豚になる—あるいは蠅の王—』パンフレットより  
(私の闘い)

## 冬の中国道はチェーンが保たない

かん! かん! かん!

切れたチェーンの端がタイヤの回転毎にタイヤホールの内側に当たる音がずっとキャビン内に大音響で鳴り響いている。

気が狂いそうだ。

自分の住む世界じゃないと感じ続けた大阪の会社を辞め、先輩から5万で譲ってもらった黄緑色のセリカに積みきれない家財はすべて会社の寮で売り捌き、真夜中の中国道を時速90km/hあまりで一路、熊本目指して爆走し続ける。途中10数台が玉突き事故を起こしていたのを対向車線に見て少しスピード落としたが……。

夜明け頃、やっと高地から下りてきて高速の雪もほとんどなくなり、チェーンをようやく外す。車ってこんなにも静かに、滑るように走るモノだったか!? 感動!

この日が分岐点です、私の人生の。

は? ってだから芝居への!

ちなみに、「黄緑色のセリカ」のタイヤホールの内側は大した傷もなかった……んですね。その後もしばらく乗ってましたが、気になったことはないですね。

※『ジレンマジレンマ』パンフレットより  
(私の分岐点)

## 夢かうつつか

「ちょっと見てほしいんだ」

私は、右手の人指し指と親指で挟んだ十円玉をグニャリと半分折り

にした。「それと」、頭が天井に触れるくらいまで浮いて見せた。降りてから、「ちょっと肩に捕まって」と言って、フルジョー君とフジカーちゃんをやはり天井程度まで持ち上げるように浮いてみた。「どう思う?」。二人は誰にも口外するなどと言って帰った。

半年後、「年老いたピーターパンが空中を飛び回りながら、その怪力を使って海賊をやっつける」筋書きの舞台に私は立っていた。

興行成績は最低だった。

「あんたが変にヒューマンドラマの筋立てにするから売れないのよ」

「大体オクジを主役にしたって知名度ないんだから客入るわけないでしょ!？」

制作を担当したフジカーちゃんは演出を担当したフルジョー君を責め立てた。

「もちろんオクジの空飛びや怪力は売りだけど、俺ら金が欲しいだけで芝居やってるわけじゃないだろ?オクジには確かにスター性はないけどそれを超えるドラマ性というか……」。フルジョー君も負けてはいない。

議論が白熱する中、私が口を挟んだ。

「なんか俺、体透けるようにできるみたいだ」

半年後、私は……おっと。寝てたな、俺。あ、ヨダレだよ、まったくシマリねえな。あれ?みんな俺見てる?バレてた?

「オクムラさん。起きましたか?」

あれー? この人フルジョー君そっくりだわ。その皮肉たつぷりの怖い優しい言い回し。「あ、いや」「はい、じゃフィルの登場から」

あ、そうだ。稽古中だった。マジマジ。どおりでみんなの視線が冷たい訳だ。……あれ? ジャージのポケットになんか……

十円玉? 半分に折れてる?

※『又聞きの思い出』パンフレットより

〈夢か現か〉

## 自慢ラッパ

昔々、お江戸の杉並木に「サル」という少年がいました。サルは褒められるのが好きでした。

「今日はいいい天気じゃのお。」と殿役のセリフを吐けば、「じょうずう!」。パチパチと拍手。至福の時でした。

大人になって結婚しても、腹が大きくなって腹先生と呼ばれるようになって、「じょうずう!」と声がかかれば、すべての苦勞が吹き飛び、自然に手が口の前に来て、見えないラッパを吹くのですが、周りの人にはま



るで高らかなファンファーレが響き渡っているように聞こえるのです。

「ラッパ吹く真似ばっかじゃ、バナナは食えないんだよ! バナナの謎はまだ謎なのだぞ。ハバナのバナナはハバナバナナ!この穀潰し!」

早口コトバを交えて激励してくれる家族ザルの温かい後押しもあり、今日もサル、こと腹先生はラッパを吹きます。

中央線アサルガヤ駅から北の方を見ると、音符が空へ昇っていくのが見えます。その下に腹先生がいます。

パラダイスです。

※『蠅の王』パンフレットより

〈私のパラダイス〉

## やっと大人の仲間入り

「奥村さん、俺ら、なまじ運転なんかできっからダメなんじゃないっすかね?」

オリコンチャートの上位に入ったこともあるロックンローラーのY君が話しかけてきた。

ここはある運送会社のロッカー室。Y君も俺もこの会社で働くトラックの運転手。

「音楽で売れてる俺の周りの奴って、みんな音楽以外役立たずなんすよ。だからこそ音楽以外でメシ食おうって発想がなくて、その必死さが実を結んでるって感じるんすよ」

運転の仕事でとりあえずメシ食えるから俺ら、ダメってこと?

「なんだかんだで俺、もう40っすよ。焦りますよ。」

3年前に50を迎え、「やっと大人の仲間入り」と思い、今後の明るい未来に目ん玉キラキラさせたばかりの俺。現役あと47年はやるぞー!

「すまんY君。君の気持ちがわからない。わかるのは君はまだまだ全然若いってことだけだ」

※『眠れる森の死体』パンフレットより

〈未成年〉

## お下がり

子どもの頃、服はいつも三つ上の兄のお下がりだった。

違う服が与えられるとき兄はいつも新品で、僕はお古だった。

兄が羨ましかった。

それらの服はいつも僕の代で用済みとなり、四つ下の弟に渡ることはなかった。

違う服が与えられるとき弟はいつも新品だった。弟が羨ましかった。

息子が僕と似た身長になった。

一人っ子の息子はいつも新品の服を与えられ、役目を終えたら僕にお下がりされる。

僕はお下がり人生から逃れられないでいる。

※『死ぬのは私ではない』パンフレットより

〈きょうだい〉



関谷美香子  
Mikako Sekiya

## 昔も今もこれからも

目覚まし時計がないと起きられない。

子どもの頃から関谷家では6時起きが決まりだったが、自力で起きられた試しがない。「百日続けば習慣になる」と言われるが、何千日続けても決まった時間に目覚めることができない。今も毎日同じ時間に起きる生活だが、遅刻ばかりで信用を失わないために、三つの目覚まし時計が頼みの綱だ。休みの日も目が覚めるまで寝てよう、などと思うのは危険だ。目覚めたら6時。早起き! と思いきや夕方6時だったことが何度もある。休日を台無しにしないためにも目覚まし時計に頼らなければ。

自力で目覚められない私の「目覚まし時計に依存する毎日」は、自力で目覚めなくなる日まで続くことでしょう。

※『パラサイトパラダイス』パンフレットより  
〈私が依存しているモノ・コト・ヒト〉

## 冬の必需品

寒い冬、寝る直前には必ず布団乾燥機。熱風で布団がホッカホカになる。私は誰もが驚くほどの寒がり、とにかく冬は機嫌が悪い。笑顔どころか気づけばよくドンヨリ無表情になってる。寒くて何もしたくない……。しかし布団に入った瞬間、ホロッと顔がほころぶ。「あったかい♪」と声に出して言っちゃうくらい幸せな気持ちになる。布団乾燥機のおかげだ。どんなに疲れてても、心配事があっても、腹が立ってても、一日の終わりにほんの一瞬、幸せになる。うっすら微笑んだまま、あっという間に夢の中。

素晴らしき布団乾燥機。ありがとう布団乾燥機。貴重な冬の笑顔はキミの働きに守られて……。今夜も気持ちよく眠りにつくわ。おやすみなさい。

※『死に顔ピース』パンフレットより  
〈私の笑顔の素〉

## 今後の人生

暇にまかせて旅をしよう。まずスペイン。ガウディーの建造物、楽しみだ。ギリシャの島の美しい街並みを歩く。イタリアでは陽気な雰囲気に浮かれてパスタを食べすぎないように要注意。アウシュビッツにも行かなくちゃ。教会で平和を祈ろう。ルーブルには1週間くらいかけたい。大英博物館も。疲れたらバリ島で太陽を浴びる。たまには日本で寺社、城巡り。お遍路さんもやってみよう。体力もつかな。忘れちゃいけない屋久島。太古のパワーをもらおう。中国、インド、メキシコ……北欧は寒そうだけどチャレンジするか。可能なら中東にも行ってみよう。

世界は広い。「老後の夢」は果てしない。

蓄えなきまま高齢になった私は、生活を切り詰め、身体に鞭打ち、若者に疎まれながら働き続ける老婆。こっちが現実。すでに覚悟はできている。芝居をやめるつもりはない。

ただ一応、夢も描いておくのが得策だ。今後の人生、何が起こるかわからないからね。

※『ビーイング・アライブ』パンフレットより  
〈老後の夢〉

## 全力で節電

急な電力不足。道路の街灯が消えた。歩道はさすがにそれほどでもなかったが、環七の陸橋など車しか通らないところはホントに真っ暗で怖かった。電車は間引き運転で時刻表も当てにならなくて、コンビニも職場もどこもかしこも薄暗くて、ネオンも消えてなんとなく全体的にうら寂しい中、電気がどこから来てるのかまったく意識していなかったのだと思い知った。本当に電気が必要なところがあると知った。病院、とか。私の家が暗かろうが寒かろうが別に死ぬわけじゃなし、街が暗くても別段困ることもない、と気づいた。無駄な電気がいっぱい使われていたんだと実感した。

今や街はすっかり明るく快適になったけど、半分くらい無駄なのかもしれないと思うと悲しい。でも私はすっかり節電癖がつき、電気代も下がりはなしで家計にも嬉しい。ビバ節電! 実行中。

※『イチエフ・プレイズ』パンフレットより  
〈「あの日」以降…〉

## 大器晩成

姓名判断だったかな、「大器晩成タイプ」と言われたことがある。確かに関谷美香子って名前、安定感抜群、ほぼ左右対称の鏡文字。縦書きするとよくわかるけど、払いが多くて末広がり。おめでたい。

大器晩成ならば、今の苦勞も何のその。年取れば取るほど良くなるってことじゃん♪ ……と思いつけてン十年、いっこうに晩成する気配がないのだが……。ハッ! まさか晩成の晩はもう100歳くらいになってのことなのか? 生きてるかな。ハッ! そもそも大器かどうか問題なのか?

と最近危惧しておりますが「大器晩成」に勇気をもらい、まあ年取れば何とかなるさ、と晩成を夢見て大器を磨くよう日々精進しとるわけです。願わくば、早めにその時が訪れますように。

※『誰も見たことのない場所2015』パンフレットより  
〈勇気づけられた言葉〉

## 窓から青春を眺める

うちの向かいは中学校。窓からは校庭が見下ろせる。夕暮れ時、野球部の練習が始まる。声変わり前の甲高い声、可愛いげのない太い声、バカデカ声の顧問の怒声。大変うるさい。腹立ちまぎれに窓から校庭を見下ろし、すっかり覚えたランニングの掛け声を一緒に唱えてみる。……我慢しよう、これが彼らの青春なのだ。

春のうるささは最強。運動会だ。連日のブラスバンド、体育教師の怒鳴り声、応援合戦練習。本番当日はそれに実況と太鼓と行進曲と歓声が加わり、100年の眠りからも目覚めてしまう。もう諦めるしかない。彼らにとっては、輝く貴重な思い出になる日なのだ……と自分に言い聞かせ、仕方なく窓から校庭をぼんやり眺めて過ごす。中学生よ、アタシの睡眠を犠牲にするぶんキッチリ青春の1ページ刻めよ! と切に願う。こうして遠くの青春を眺めながら、この家でまた1年が過ぎてゆくのだ。うるさいなあとぼやきながら。

※『海のとっぺん』パンフレットより  
〈私の家〉

## 理科の時間

中学の理科の先生は20代前半の男の先生だった。オールバックで太い眉。いつも赤いジャージ。ガニ股で自転車に乗って登校する。職員

室ではいつも煙草をくわえてるヘビースモーカー。机の下には日本酒の一升ビンが常備されてる、との噂。某大学の剣道部でしごき抜かれ、剣道はめっぽう強いらしい、との噂。「ザ・昭和の不良」的要素満載のこの先生は授業中、必要以上に「ね」をつける。「じゃあね、教科書のね、52ページね、このね、生態系のね……」。純真な中学生を怖がらせないようにとの工夫なのかもしれないが、あまりに「ね」を連発するので可笑しくてたまらない。考える時も「えー……ね」。しまいには「ね」。単独も飛び出す。私たちは先生が何回「ね」を言うか数えることに夢中で、笑いを噛み殺しながら200以上の「ね」を数え続け、まったく理科は学べなかった。

※『毒舌と正義』パンフレットより  
〈忘れられない先生〉

## 一年中

私は衣替えをしない。「6月1日から夏服! 10月1日から冬服!」そんなバカな。本来はいつだって着るべきものを着ればいいのだ。そもそも四季は均等にはやってこない。私にとって1年の大半は冬だ。真夏でさえ、バカみたいな冷房攻撃のせいで防寒しなきゃいけない。私の着るべきものは防寒服なのだ。いちいち冬服夏服を交換してる暇はない。寒さに備えて私のクローゼットは一年中、長袖のアイテム、セーター、トレーナー、レッグウォーマーが前線にある。ヒートテックはもはやパンツ、靴下と並ぶ最前線だ。冬の布団だって一年中すぐ使用できる状態に準備されている。

残念ながら私の備えはたいがい共感してもらえない。いつも「おかしいよ、格好が!」と言われる。うるさい。私はいつでも誰よりも寒さに備えているだけだ。さあ、今日もクローゼットから手当たり次第に20余枚を装着して、極寒に備えるべし。

※『流れゆく庭-あるいは方舟-』パンフレットより  
〈私の備えていること〉

## 親友

大学の頃からの親友。当時、毎日毎日飽きることなく語り合っていた。卒業後、道は別れたけれどちよくちよく会っては語り合っていた。数年前、彼女は結婚した。相手はまさかの外国人。香港での結婚式。朝から夜中まで1日かかりの香港流の結婚式はサイコーだった。私が知ってる中

で一番ステキな彼女がいた。私は嬉しくて泣いた。絶対着物を着よう! と思って、自分で着られるように練習を重ね、着物を持っていった。大好評だった。日本から来た花嫁をみんな好きになってくれた。作戦大成功だった。結婚後、辰巳にかまえた新居に幾度となく遊びに行き、たらふくのビールと手料理をご馳走になり、ありとあらゆることを語り合った。先日彼女はダンナと猫と共に香港に移住してしまった。なかなか会うことができなくなってとても寂しい。本当に寂しい。

何年何十年経っても、いつも同じように語り合える親友。離れていても彼女は、私の大切な人、のひとり。

※『息をひそめて-シリア革命の真実-』パンフレットより  
〈私の大切な人〉

## 茶色いやつ

東京に出てきてすぐの頃、帰宅してドアを開けると、廊下に茶色い物体が……。 「?」と目を凝らす……ギャア! 蛾だ! 世界で一番嫌いな蛾! 粉っぽい羽を広げ床にへばりついている。慌ててドアを閉めた。落ち着け! 刺激して飛ばれたら地獄、それだけは避けねば。

意を決してソロソロとドアを開ける。まだ、いる。玄関脇の洗面所からバケツをとる。ヤツは気配を感じたら飛びたつ。急がねば。でも怖い。逃げ腰で一步一步近づく。あと数十センチ、今飛ばれたら……手が震える、足も震える。ヒィ! と叫びながら、とりあえずバケツを被せることに成功! 勢いのまま外へ飛び出しドアを閉める。外でオロオロしていると、「何してんの?」、同居していた兄、帰宅。涙ながらに説明する。彼は表情も変えず何も言わず、スッとドアを開け、スッとバケツを取り、スッと素手で蛾をつかみ、スッと窓を開け、パッとヤツを外へ放った。蛾の恐怖があっさり消え去ったこの時、生涯で一番兄を頼もしく思った瞬間だったな。

※『恐怖が始まる』パンフレットより  
〈私の恐怖体験〉

## 地図

地図は楽しい。大旅行、小旅行、近所の散歩、いつでも活躍するのが地図。でも地図は見ながら歩くもんじゃない。地図に描かれたその道すからを頭に叩き込むのが楽しいのだ。試せ己の記憶力! そうやっていざ歩きだせば、いろんなものに注目し、自然と周りをよく見ることになる。も

ちろん迷子になることもある。うん、結構ある。でもよほどじゃなければ、なんとなくの方向性と勘で乗り切る。思い出せ全体像! で、後から地図を見直すのがまた楽しい。ああ、ここで曲がっちゃったんだな。ほう、この先にこんなものがあったのか。ええ? これじゃわかるわけないじゃん。そうか、こう進めば復帰できたんだな……など、反省とダメだしと記憶の再確認。

駅前の近隣地図、観光パンフレットのイラストや写真入りの地図、これ大丈夫? という手作り地図……。ただ見ているだけでもワクワクする。スマホなんかの高性能地図はかなり重宝だけど、いろんな地図がこの世から消えないでほしいな。

※『奇妙旅行』パンフレットより  
〈旅のパートナー〉

## 13日の金曜日

私がこの世に生まれ落ちたのは7月13日。金曜日の真夜中だ。

「13日の金曜日」ってのはどうも不吉な日であるという風潮がある。キリストがなんちゃらとか、最後の晩餐がなんちゃらとか、まあ、諸説あるようだが、あまりはっきりした因果関係はないはずだ。しかしながら、日本でもなんとなく、「13日の金曜日」を意識する人も少なくないね。13日が誕生日だと言うと、「もしかして金曜日だったりして〜?」とよく言われる。有名な怖い映画のせいだと思うけど。まあ、「12日の木曜日」よりはインパクトがあるにはある。しかも真夜中ってのがまた。

まあ、13日の金曜日の真夜中に生まれても、別段不幸ではないし、私の周りで不吉なことが起こったりもしていない。たぶん。ジェイソンに襲われることもない。今のところ。

だけど実は……私には隠された悪しき能力が備わっている。かもしれない。だから私を怒らせたりしないほうがいいよ。私の呪いは結構強力だからね。気をつけてください。フフフ。

※『産まれた理由』パンフレットより  
〈私の産まれた日〉

## 今日も闘う

私は常に闘っている。生活エネルギーのほとんどをこの闘いに費やしていると言っても過言ではない。闘いに欠かせないアイテムはヒートテッ



ク上下。そう、敵は「寒さ」である。

私は負けない努力を怠らない。七味タバスコ豆板醤、生姜根菜豆ひじき。生野菜不可。風呂2時間。大好きなビールも冬は常温。そしてとにかく着込むべし。真冬には上下合わせて20枚は着る。目も当てられない様相になるが、そんなことを気にしては凍死だ。この着膨れは1年中続く。むしろ夏こそ熾烈。冷房という文明の利器をめぐり、暑がりさんとの激しい攻防戦。「季節感無視の格好だ」とほざく輩には、「真夏に冬みたいな温度にしていることが季節感無視だ」と言ってやれ。常に服が重いので筋トレにもなる! と自分を励ます。あとはとにかく「寒がりアピール」しておけば完璧。呆れ果てながらも皆がさまざまな暖かアイテムをくれる。ありがたい。どんどんくれ。

まさに今日も、今も、闘っている私、舞台の上で汗をかいていたら大勝利だよ。

※『みんな豚になる—あるいは蠅の王—』パンフレットより

〈私の闘い〉

## 15歳のささやかな決断

高校受験。成績優秀な私はどこでも選ぶことができた。

県立? 女子校? 進学校? 大学付属?

「男は苦勞したほうがいい、女の子は苦勞しないほうがいい」と言う父の言葉に甘え、日大付属に決めた。演劇部にいたというだけで、日芸に進むのもいいなと思った15歳の私。

見事合格したそこは理工学部直属の付属校だったので、半分以上が理系。大半は理工学部に進んだが、私は目論みどおり日芸の演劇学科に入学した。演劇三昧の大学生活はサイコーだった。

そして卒業してもサイコーの演劇三昧生活はたいして変わらず、そうこうするうちいつしか演劇が本業になった。

「女の子は苦勞しないほうがいい」と言ってくれた父には申し訳ないが、気づいてみれば忙しくて貧乏で苦勞尽くしの俳優生活を突き進み、いつまでも父に心配をかけ続けるハメになっている。

15歳の私が進学校を選んでいたら、確実にバリバリのキャリアウーマンになってただろうな。でもやっぱり、そんな人生はごめんだね。こっちで良かったと思うよ、15歳の私。

※『ジレンマジレンマ』パンフレットより

〈私の分岐点〉

## 酔う

お酒が好きだ。

酔っ払うのは夢の中にいるのと似ている。

まだ飲み始めたばかりの若かりし日々、その夢の世界が楽しかった。感情大解放。誰も彼もゴキゲンで、腹筋が痛くなるほど笑う。時にはこの世の終わりだってくらい泣く、喚く。仲間たちと熱く熱く語らう。恥ずかしさも一切なし!とにかく酔っ払って夢の世界へ!

そんなある日、ゴキゲンな夢の中にいた私。

ガンガン音楽をかけ、ノリノリで踊り、大声で歌い、いつの間にか家でひとり大宴会! 気分はサイコー!

……ピンポン……どこからか微かに聞こえる音。ん? ……ピン、ポン……あら? 玄関チャイム? どなた?

フラフラと魚眼レンズを覗くと、隣に住むサラリーマンのおにーさんが腕組みしてドアの前に。

何よお! 文句あるならそのケンカ買うわよっ!

挑戦的にドアを開けた酔っ払いに、彼は落ち着いた声で紳士的な笑顔を浮かべ、

「すみませんが、音が少し響くので、ボリュームを落としてもらえますか?」

……急激に私は夢から覚めた。

「すみませんでした……」

速攻で音楽を切った。イライラして我慢できなくなるまで我慢して、でも怒鳴りつけたい気持ちをグッと抑えてオトナな態度で対面したそのおにーさんが、なんだかとても正しく思えた……。

今もお酒は大好き。でも最近夢の中にはあまりいかない。醒めてみれば現実もかなり味わい深いとわかってきたからねえ。

※『又聞きの思い出』パンフレットより

〈夢か現か〉

## 太陽とビール

よく晴れている。ほんの一筋の白い雲が美しい。

そしてとにかく暖かい。むしろ暑くてもかまわない。

空は広く高い。誰もいない。

木々のそよぐ音だけが聞こえる。

芝生の匂い。寝転んだ傍らにはよく冷えたビールがどっさり。  
大好きなキリンラガーがいい。喉に流し込み、鼻歌など口ずさむ。  
気分がノッてきたら大きな声で歌ってみたりする。  
ローストビーフのサンドイッチなんかをかじる。ビールをゴクゴク飲む。  
目を閉じて照りつける太陽を存分に味わう。少しウトウトするもよし。  
酔いもあわせて陽気な気分になり、裸足でデタラメに踊ったりする。  
汗をかいたらまたビールをガブガブ飲む。  
多分ちょっとニヤける。  
まだまだビールはたっぷりあるのだ。そして何より、暖かい。  
そんな瞬間、私は「パラダイスだわ～」とつぶやく。きっと。  
——と、寒さに震え、こじんまりした家の風呂につかり、安いお湯割りで  
我慢しながら想像する。  
今のところ、パラダイスは遠い。

※『蠅の王』パンフレットより  
〈私のパラダイス〉

## 未成年最後の日

昔から日記をつけていた私。  
今や遠い過去となった「未成年最後の日」に、果たして何を思い、どんな決意をしていたのかしら？ どんな情熱がそこに？  
と、揆をかぶった過去の日記を引っ張り出し、ドキドキしながら開いてみた。平成5年7月12日……  
「月曜日、雨。今日は暑かった。バイトが超忙しくて最後はもうヤケだ！今、米を洗ってて気づいたんだけど、手首の痛みがどんどんひどくなってるみたい。やっぱ病院に行ったほうがいいかもしれないな。」……………。  
期待は見事に裏切られた。  
まるっきり緊張感ないじゃない！  
せめて「明日20歳になるんだ！」とか「今日で10代はおしまい！」とかくらい書いててほしかったわ。  
自分で自分がかつくりと肩を落とし、落胆したのは言うまでもありません。しっかりしろよ～お前！今の私のほうがよっぽど常々日々諸々色々散々切々と決意しながら生きてるよ！  
でもこれが「未成年最後の日」のリアルなんだなあ。

※『眠れる森の死体』パンフレットより  
〈未成年〉

## 兄弟

8歳の甥っ子と4歳の姪っ子。この兄妹はホント可愛い。

妹はとにかく兄の真似をする。兄が笑えば笑い、歌えば歌い、叫べば叫ぶ。兄の後をついてドタバタ走り回る。大人たちがほうっておいてもキヤッキヤ言いながら二人で遊んでる。時にケンカになり、妹が泣き出す。最終的には兄が折れる。いつでも兄が親分で、妹が子分。

正月休みの実家でゴロゴロしながらそんな可愛い兄妹を見ていると、ぼんやり思い出す。

私と兄の幼い頃。私たち兄妹もこれとそっくりだったなあ。

私は兄の真似をして、ドタバタキヤッキヤ。私が泣けば兄が折れ、兄が親分、私は子分。仲良く元気に遊んでいたなあ。

懐かしい気分でふと横を見ると、無精ヒゲにジャージ、私同様ゴロゴロしてるオッサンが……。兄よ……。君は覚えているかい？ 幼い頃の私たち、君の子どもたちとそっくりだった時代を……。

ひとつの部屋に二組の兄妹。正月の居間で実感する「兄妹の変貌」なのでした。

※『死ぬのは私ではない』パンフレットより  
〈きょうだい〉



山下夕佳

Yuka Yamashita

## 神よ、許したまへ。

昨年、劇場仕込み中に猛烈な歯痛に見舞われた。劇場前の歯科医院で応急処置、痛みはピタリと収まった。さて、公演終了までしか薬はもたない。急げや急げ! 地元の歯医者を探さなきゃ。うさぎさんシールの笑顔を信じ、お子さま歓迎ムードあふれる歯医者に飛び込んだ。しかし神経を抜くまでに達した虫歯は、先生が優しくろうが、うさぎが笑っていようが、どうにもなりやしないのだ。

診療椅子で泣きました。「もうしません」と神様に謝りながら、チビっ子の隣で泣きました。

寝る前に飴をなめてはいけません! なめながら眠ってはいけません! もう歯磨き後になめたりしないから。私、我慢するから。ねえ神様……1日8個くらいは許してちょ。「春日井のニッキアメ」

※『パラサイトパラダイス』パンフレットより

〈私が依存しているモノ・コト・ヒト〉

## 寝言は寝て言え。的な

ほんわか幸せをしみじみ感じる旦那さまと暮らします。世田谷が好きだから世田谷で。可愛いお手伝いさんと無口で優しい庭師を雇っていいなら、大きな庭と、地下プールのある小さな屋敷に住みたい。屋敷は小さいのがミソなの。年1回の海外旅行はまずギリシャ。エーゲ海を眺めて、陽射しと町並みを存分に楽しむんだ。あとはイタリアとかスペインとかスイスなんかに行ってもいいかな。オホホ。季節ごとの国内旅行は……そうねえ～春に小豆島。夏に小笠原。京都の紅葉は押さえないところだわね、ありきたりだけど。朝昼晩ご飯作るなんて真っ平ごめんだから、優しい旦那さまはプロ顔負けのお料理上手でしょう。自家製の燻製チーズをつまみに二人でビール飲みましょね。健康のために海辺を掃除するわ。砂浜のゴミ拾いしながら

朝日を浴びて帰宅。シャワーを浴びたらテラスに朝食が出来てる寸法よ。あら？ 世田谷に砂浜はないわね! いいの、いいの、夢だから。

※『ピーピング・アライブ』パンフレットより  
〈老後の夢〉

## 黒い袋の声を聞け

今年2月、福島県の飯舘村を訪ねた。

空き家、空き家、空き家。至る所に山積みされた黒い袋。動かない風景の中で、毒々しいピンクの幟だけが風にはためく——「除染作業中」。

飯舘村は、その7～8割が山だという。国は本気で、あの山々すべてを除染する気だろうか？

朽ちていく家屋、牧舎、ガソリンスタンド。高く突き抜けた飯舘の空には放射能が舞っている。

原子力は、人間が信頼をよせるべき相手じゃない。気の優しい力持ちじゃない。気安く頼っちゃいけない。巨大な黒い袋に、あの日以降溜まりに溜まった住民の、生き物たちの憤懣をギッシリ詰めて国会の上から落としてやりたい。なんとかなるようなふりしてる、何もなかったふりしてる、あの方面の方々にこそ、除染が必要だろう。

「あの日」は、過去にはならない。

※『イチエフ・プレイズ』パンフレットより  
〈「あの日」以降…〉

## 月並みですがね

タイトルと書き出しを奥村先輩みたいにして、人気を集めようという魂胆です。月並みですがね、私は「頑張れ」と言われると勇気と元気とやる気が出ます。よく、「心が弱ってる人に『頑張れ』と言っちゃいけない」と聞きます。「これ以上、何を頑張れというの?」と感じてしまうのだとか。が、幸か不幸か、私の心はそんな仕組みとは無縁のようで、「頑張れ!」と言われれば、俄然頑張る単純さであります。父がよく言ってくれる「ちばれよ!」も勇気がわく(「頑張れよ!」の意)。新しい役に挑戦する時、初めて台本を離して立ち稽古に挑む時、小さく自分に「頑張れ! ちばれ!」って言って勇気を出す。古城さんには「頑張れ自分! のセリフには何の価値もない」ってよく言われるけどね。(笑)

※『誰も見たことのない場所2015』パンフレットより  
〈勇気づけられた言葉〉

## 海にこだわる

神奈川県藤沢市が私の実家。この芝居の「華ちゃん」同様、私もずっと海を眺めながら育った。引っ越しもした。茅ヶ崎の山のほうから、藤沢の山のほうへ。あら？ 山のほう山のほうって……海はどこぞへ？ そうなのよ、湘南という括りの中にいれども、海まではバスに乗らねばならぬ距離。残念。

しかしチャンスは訪れた。夢の一戸建て計画！ まさかの線路超え!?(線路を挟んで海のほう、山のほうと分かれる)。が、湘南の海沿いは値が高い。山下一家は二宮や大磯のほうまで見て回ったが……海ならいいってもんでもないんだな。例えば、横浜の港を見て育った人は港が好きだろう。私たち家族は湘南海岸の砂浜が好きなのだ。結局、父と母は執念で藤沢の海近くに素敵な家を建ててくれた。棟上げの日からもう20年以上経つけど、今でも私たちは、「ここに建ててよかったね」と、事あるごとに幸せを嘯みしめ合っている。

※『海のとっぺん』パンフレットより  
〈私の家〉

## 街にジャスミン香る頃

お前、まだシンナーやってるのか？ クスリか？ あの窓は何のためにある？ お前が飛び降りるためだ。お前より鯉節のほうがよっぽど芝居がうまい。鯉節はうどんの上に乗せたらくるくる動くだろ？ それがリアクションだ。お前らはバカなんだからものを考えなくてよろしい。大きな口を開けてはつきり台詞を言え。そのかわり、猛スピードだ。バカだが、お前らは若い。お客の何倍ものスピードで芝居をしろ。客と同じ時間かけてたら、お前らの考えなんかすぐバレる。客の想像力のスピードに勝て。悩め。役者は、3秒あれば変われる。

……3月半ばに恩師は死んだ。笑顔の写真をもらってきた。金ピカの額に入れて、傍らの一輪挿しにジャスミンを一房。

※『毒舌と正義』パンフレットより  
〈忘れられない先生〉

## 師匠、見てください!

昨年の積雪の折、アパート前の雪かきをすべくチリトリを手に家を出たが、路面は凍結。チリトリでは歯が立たない。と、お向かいの家が解体工

事中で、私は見つけた。神々しいお姿はまさに雪かき界のキング。カクスコ様である。「おじさん! この四角いスコップ貸して!」。図々しく借りたはいいが、初めて握ったことに握って初めて気が付いた。ここから私と師匠の愛のセレブレーションが始まったのだ。握り方から力の入れ方、腰の使い方までをきっちり仕込んでもらい、気がつけば私は解体工事責任者である彼を「師匠!」と呼び、師匠は私を「女優!」と呼んだ。師匠は家より雪の解体に力を注ぎこんだ。二人で道路を開通させ、道路を眺めながら祝福のコーヒーを二人で飲んだ。

師匠、見てください! 今年は私、一人で開通させました! カクスコも買ったんです! 私は、雪に備えています。

※『流れゆく庭 あるいは方舟』パンフレットより  
〈私の備えていること〉

## 目玉

浴室の扉の外で音がした。確か風呂に入る直前に、ゴミを出しに行こうと思って……あ、鍵閉めてないかもなあ。バカだなあ。なんで忘れて風呂入ってた。袋の口も縛らずに置いたから中のゴミが崩れたな。……再び、ガサゴソ……ゴソッ。……扉の外に人がいる……。

落ち着け! 落ち着け! 落ち着け! 落ち着け! 何が怖いのかを具体的に考える!

丸裸で、うるさいくらいに鳴り響く自分の心臓の音と闘いながら、必死に恐怖の源を考えた。「家族に会えなくなること。それが死の恐怖」。後にも先にも、あんなにきっちり死を覚悟したことはない。目を閉じて、家族一人一人に別れを告げた。こんな最後でごめんなさい。

扉を開ける——誰もいない。びしょ濡れのままバスタオルを巻きつけ、押入れ、ベッドの下……ベランダを見ようとしたその時、気配を感じて振り向いた。玄関のドアが薄く開いていて——こちらを覗く目玉がひとつ。……これ、本当の話。

※『恐怖が始まる』パンフレットより  
〈私の恐怖体験〉

## 最小限

とにかく、荷物が多い。長年リュックを愛用しているが、よく考えてみると、ほとんど変わらぬ毎日の移動の際に必要なモノなんて、さほどないは



ず。ちょっと格好もつきたいし……ショルダーにしてみた。財布、携帯、ティッシュ……こんなものかな。

指を切った。絆創膏？ あ……リュックの中だ。定規を使いたいが……ペンケースもリュックの中。印鑑はリュックのポケット。風邪薬、やけどの薬、マスク、油性ペン、カッター、はさみ、歯ブラシ、タオル、ハンドクリーム……残らずショルダーに詰め替えてと。

肩が壊れる！ 片方の肩にかかる重量が並じゃない！ で、格好のいい真っ赤なリュックを買いました。うーん、マンガム。いつでも何でも入っていて、両肩に同じずつの負担。これでいい。

え？ 旅のパートナー？ たとえ一泊でもゴロゴロ付きの大きなスーツケース。背中には真っ赤なリュック。斜め掛けに小さなバッグ。もちろん全部、中身はバンバン！

※『奇妙旅行』パンフレットより  
〈旅のパートナー〉

## いちにいにいにい

夜中の生まれと記憶している。あたりは真っ暗で……ウソウソ。胎内記憶でも誕生の記憶でもなくて、何回も聞いているんだけど覚えられない普通の記憶……だったら覚えとけよってネ。

——12月22日。きっと町はクリスマス前で浮かれポンチだったに違いない。そしてその中でも最高に浮かれポンチだったのが、私の両親だったネ。絶対。我が家に50冊近くあるアルバムには、私が……私たち姉弟が、いかに大事に大切に真剣に死ぬほど愛情を持って育てられたかがギッシリ詰まってる。「命名、夕佳」の写真もある。ま、と～ぜん愛くるしい私の写真のほうが弟の写真より多い。わっはっは。

もう亡くなったお祖父ちゃん、お祖母ちゃん、パパとママを産んでくれてありがとう。私は私の家族が大好きです。

ちなみに私の産まれた年は、山本リンダが『困っちゃうナ』でデビュー……16歳。ウヒョ～！ お父さん、お母さん、娘も年を取りました～！

※『産まれた理由』パンフレットより  
〈私の産まれた日〉



## 日暮一成

Kazunari Higurashi

### 忘れない

タバコがないと生きていけない。

子どもの時から身近で祖父が吸っていた「セブンスター」がかっこいいと思っていた。CMもかっこよかった。豊川悦司さんが出演していて、確かタバコのCM放映は、あれが最後だったと思う。テーマは「追悼」。喪服姿の老婆と豊川さんが雨宿りをしていて、豊川さんがタバコをくわえると、老婆が喪服の袂からマッチ箱を出してポッと火を点ける。豊川さんが一言、「忘れない」。セリフはそれだけ。かっこいい! 俺もセブンスターの似合う大人になりたい! 豊川さんになりたい! そっか、そう思うバカがいるからタバコのCMが禁止になったのか?

セブンスター吸うと亡くなった祖父を思い出す。優しく厳しかった祖父…  
…忘れない。

※『パラサイトパラダイス』パンフレットより  
〈私が依存しているモノ・コト・ヒト〉

### 人間も動物

昔、動物園で見たでっかいダンゴムシのダイオウグソクムシ……怖い。震えが止まらない。虫、嫌い。でも動物は顔に似合わず好き! 犬、猫はもちろん、動物園に行き、ひたすら草を食べているカバ、脱糞しているゾウ、威嚇するゴリラ……ヤツらの行動を見ると自然と笑顔になる。でっかいトカゲや猛毒を持つ極彩色のカエル、爬虫類や両生類の肌艶もたまらない。ワシ、フクロウなど鳥類の威嚇行動も大好きだ。さまざまな動物に出会えて笑顔が絶えない動物園。

そこで一番笑顔にしてくれるのは、それらを見ている元気な人間の子どもたち。いつか自分も子どもを連れて動物園に行ってみたい。頼むから誰か一日、子守させてくれ!

※『死に顔ピース』パンフレットより

## 締めの一曲

バブルが崩壊し「失われた10年」に育ったせい？ 独り身のフリーター劇団員だから？ 夢なんてないが、音楽好きの奴らとの酒の席で「死ぬ直前に聞きたい曲」という話で盛り上がったことがある。自分が追っかけてるバンドの曲。ミュージカル好きな奴はRENTの『Seasons of Love』。ほかにも『戦場のメリークリスマス』、ブルーハーツの『1001のタンバリン』、ジョン・レノン『イマジン』……様々だった。僕は……選ぶとしたら、ミッシェルガンエレファント『世界の終わり』。

♪ 世界の終わりがそこで待っていると 思いだしたように君は静かに待つ  
パンを焼きながら待ち焦がれている やってくる時を待ち焦がれている♪  
ウイスキーでも飲みながら、「やってくる時」を穏やかに迎えるために、芝居  
・音楽・酒・女・仲間……限られた時間を楽しく共有していきたいけど……  
こんな人生、ダメ人間まっしぐらだな! とりあえずお先真っ暗老後に乾杯!

※『ビーイング・アライブ』パンフレットより  
〈老後の夢〉

## いわきの海には絶対行く

ブルーハーツで昔から一番好きな曲『チェルノブイリ』。怒りと愛の曲。発売禁止になりました。歌詞の「チェルノブイリ」のところを「福島」にしてみました。

♪ 福島には行きたくねえ あの娘を抱きしめていたい どこへ行っても  
同じ事なのか? 福島には行きたくねえ あの娘とkissをしただけ こんなに  
ちっぽけな惑星の上 まあるい地球は誰のもの? 砕け散る波は誰のもの?  
吹きつける風は誰のもの? 美しい朝は誰のもの?

……なんか悔しい、悲しい。一度、いわきの海に行った事がある。「あの日」  
以降、いわきの海が呼んでる。太陽まぶしっ! 砕け散る波! 吹きつける風!  
その波と風にも放射能が入っていても、ステキな彼女見つけてまた必ず  
行くから待ってろよ!

※『イチエフ・プレイズ』パンフレットより  
〈「あの日」以降……〉

## Lose Yourself

中学の時からRockが好きだ。Hip-Hopは大嫌い。言葉の韻を踏んでリズムを取って、だぼだぼのジーパン履いて気取ってるのがどうしてもかっこよく見えない。でも1曲だけすげえ好きな曲がある。エミネムの「Lose Yourself」。……役なんかねえし、安月給でどーしよーもねーよ……と腐っていた時にハッとした曲は、好きなRockのNIRVANAでもSex Pistolsでもなく、デトロイトのトレーラーハウスからスターになった彼の曲。初めて訳詞で聞いた時、絶対にこのまま辞めたくないと……駄目な気分を払拭するHip-Hopの言葉の洪水に喝を入れられた。もちろん俺はエミネムほどデカイ人間には程遠いが、今に満足せず、貧乏生活を続けている。

♪You can do anything you set your mind to, man

※『誰も見たことのない場所2015』パンフレットより

〈勇気づけられた言葉〉

## 心穏やかでありますように

実家から歩いて5分くらいの場所に祖母が独りで住んでいる。自分が小学生の頃に家族6人で住んでいた家だ。10年前に祖父が死んだとき同居しようという話が持ちあがったが、祖母はそれを拒み、独りで暮らすことを選んだ。昔は祖父が手入れした庭やら盆栽、柿の木も立っていたが、今は何ひとつ残っていない真っさらな庭がある。祖母はそろそろ90歳に手が届く。あんなに曲がった腰と患った目でどうやって独りで暮らしているのか……。

手押し車を押して実家に来る祖母。今年の夏、祖母を送るついでに寄ってみる。波のように押し寄せるガキだった頃の記憶。祖父の遺影。小学生の時に書いた絵。柱に書いてある落書き。懐かしい匂い。「ああ、世界の終わりが来るなら、ここで迎えたいなあ……」と不意に思う。祖母は今日も光の差し込む居間のソファで独りぼっち……何かを思いお茶を飲んでいるだろう。

※『海のとっぺん』パンフレットより

〈私の家〉

## パパへ

今年の4月1日。劇団事務所で何かの仕事を終えた時、ふとパソコンでfacebookを開き、「K先生が死んだ」との情報を見た。先生も学生も変人だらけの大学だったので、「今日エイプリルフールだし冗談だろ?」

というコメントもちらほら。正直、自分もそう思いたかった。が、そんなことあるわけなかった。

先生はまだ40代。ブラックユーモアが大好き。早過ぎる死だったので、お通夜には会場に入れないうらいの弔問客。行く途中に観た桜並木は満開、風強い、寒い、先生の遺影……笑えるなあ。初めて見たお子さんは男の子2人。先生にそっくりじゃん! 男なんだから泣くな! てか先生……パパだったんだあ。最後に先生の顔を見たら気持ちよさそうに寝てるから笑える。胸の上には先生の吸っていたタバコと……「パパへ」と書いてある封筒。

こんなに皆に愛されていたのに……K先生、また皆で飲みたいです。

※『毒舌と正義』パンフレットより  
〈忘れられない先生〉

## 転がる石

備えていること……、ないです。行き当たりばつたりの人間なので。今年31歳になるのに災害、貯蓄、老後、結婚……何も備えていない! でもなんだかんだ備えていても「駄目なときは駄目だろう!」と考えてしまうのだよなあ……。ボブ・ディランの『ライク・ア・ローリング・ストーン』は言い過ぎかな?

でもなんか震災以降、「転がる石」だと思えちゃうんですよ。結局、なるようにしかならない。芝居とか、生活とか。必死で予定立てて一生懸命やって、備えていても、それを横からぶっ壊す奴らはいくらでもいる。金持ちだろうが貧乏だろうが、夢があろうがなかろうが、死ぬときゃ死ぬし。

でも転がる石を、うまく転がれるように削ることはできる。その石を誰かに、何かに変な形に削られたら……また削ればいいな。

さて、『流れゆく庭』はどう転がりますかな。あつ、転がるんじゃないかと、これは流れるか!

※『流れゆく庭-あるいは方舟-』パンフレットより  
〈私の備えていること〉

## チーねーちゃん

幼稚園に入る前、母の友達で「チーねーちゃん」という人がいた。本名はチズコさん。

いつもタバコを吸っていて、僕にキスをしてくる女性。仕事はオモロイと焼き肉店を営み車はベンツ! 後から知ったが彼女は在日だった。当時の印象は背がでかい! タバコ! ベンツ! 格好いい! 肉おいしい! KISS!

ある日、母から「チズコさんが癌になった」「お店を新しくしたが上手いかず手を引くことにした」と聞いた。中学の時、久々に会ったチーねーちゃんは、治療の影響でとても太り、昔の面影はなかった。その時会ったのが最後で、時々母から「東京の病院に入院している」「薬の副作用らしいんだが失明した」と聞かされた。

一昨年の正月、家に帰ったときに母から、「去年の10月1日にチーねーちゃん亡くなった」と聞かされ愕然とした。その日は自分の誕生日。「よりによってその日に……」と思ったが、それから誕生日にはチズコさんを必ず思う日になり、今さらだが、大事な人になる。今でもくわえタバコで長身の彼女は理想の女性だ。

※『息をひそめて-シリア革命の真実-』パンフレットより

〈私の大切な人〉

## 初めての隣人

引っ越して半年すぎた頃、隣の部屋に小柄な男性が越してきた。ちゃんと挨拶もしに来て、「礼儀正しい人」という印象だったが、ある夜、酔っ払っているのか彼は訳のわからないことをひたすら怒鳴り続けた。一晩ならまだしも、ほぼ毎晩それが続いた。ある夜、ノックしてきて飲みを誘われたが、もちろん断った。警察も何度か来た。僕はできるだけ関わらなくなかったので、夜帰らず明け方帰ったこともあった。バイトも極力深夜に行かなかった。

ある日、平日の昼、隣人がいる気配がした。変だ、彼はその時間帯、いつもいなかったはずだ。数日経つと、部屋にいる気配が消えた。外から部屋を見る限り、家財道具はそのままで彼だけが消えた。数ヶ月後、夜勤明けで寝ていたら、隣の部屋で複数の男たちの声がする。彼らが去り、外から隣の部屋を窓越しに見たら、家財道具がすべてなくなっていた。彼はどこへ行ったのか? 死んだのか? また帰ってくるんじゃないか? 夜中、彼の部屋の前を通るたびに、あの訳のわからない絶叫を思い出す。

※『恐怖が始まる』パンフレットより

〈私の恐怖体験〉

## 僕の産まれた日

1983年10月1日。その日の夜、母は陣痛が始まり、トイレに行ったらどうやら破水も始まっていたらしく、「あ、産まれる」と思い、寝ていた父を起こして車で産婦人科まで連れていってもらおうと思った。「生まれそうだから車で連れて行ってくれ」と言ったら、「うん……明日な……」。そのとき父はお酒を飲んで酔っていたらしい。

母は必死の思いでタクシーを呼び、病院へ到着。父不在のまま分娩台へ。無事に僕は生まれ、その後、祖母が病院に来てくれましたとき……じゃねーよ親父!! 呑気に酒飲んで寝てんじゃねーよ! いつ病院に来たんですか? どの面下げて病院来たんだ! あー、産まれた瞬間のことなんぞ覚えてないで良かった!

しかーし、そんな父と母がいたからこそ今の僕がいるわけであって、妹もいて、今まで4匹の犬たち、そしてウサギ1羽に囲まれ。育てていただき感謝。

ちなみに、僕は酔っ払うと電車の床、路上、どこでも寝てしまいます……。蛙の子はかえる……。

※『産まれた理由』パンフレットより  
(私の産まれた日)

## 車にドーン!

23歳、冬の終わり。

時間に余裕があったから南阿佐ヶ谷の喫茶店で、渡された台本を読んでいた。その日はオーディション。PM6:00に知らない人からの着信電話。もちろん、無視。

ふと目を落とすと、そこにはオーディション会場への道のりと連絡先……あれ? この書いてある電話番号……さっきかかってきた電話番号だ……俺、時間間違えた……

猛ダッシュで店を出て、会場へ向かう。

途中、「バックれ」の4文字が頭に浮かぶが、とにかく当時は劇団に入れたかったため、その思いは吹っ切った。

小さなスポーツ用品店を曲がった瞬間、車にドーン!!

ゆっくり走ってきた車に俺が思いっきりぶつかった。

運転手は「うわー!」って顔。俺は「すいません!急いでるんで!」。

思いっきり遅刻して挑んだオーディション、絶対不合格と思いきや、な

ぜか合格……気がついたら5年目……。

「あの時バックれていなくてほんとによかった!」と心の底から叫べるのはいつになるのか……下手糞ビンボー役者日暮……君の春はまだ来ない……。

※『ジレンマジレンマ』パンフレットより  
〈私の分岐点〉

## エンターテインメント

中2の時、「酒鬼薔薇聖斗」が捕まった。

彼は一つ年上の中3。テスト直前だったが、テレビにかぶりついて臨時ニュースを見ていた。

翌日の話題はもちろん、そのことで持ちきり。しばらくテレビ、新聞、週刊誌は彼の話題ばかり。拍車をかけた「FOCUS」の実名・顔写真掲載報道。そのコピーを校内では同級生が、駅前では知らない人が500円とか1000円とかで売っていた。

毎日毎日、どこでもいつでも「少年A」。次第に、「未成年＝特殊な人間」と見られているようで、なんだか変な気分になった。テレビや雑誌を見れば、あちこちに「最近の子どもはわからない」「10代が怖い」。

明らかに未成年を見る世間の目が変わった。

テレビも週刊誌も毎日、どうでもいいようなことまで事件に関連づけて垂れ流す。流す側も見る側も、酒鬼薔薇や未成年をネタに、「少年犯罪」という名の「お祭り」を楽しんでるだけ。

十把一絡げにしないでくれよ。

俺ら、一人一人をちゃんと見ろよ。

ずっと、そう思って腹を立てていた。おかげで僕は未だにちょっとしたことで腹を立て、熱くなる。

※『眠れる森の死体』パンフレットより  
〈未成年〉

## 妹の話

小学5年生の時、父のアダルトビデオを妹とともに発見し、二人で鑑賞したことがある。

4年生だった妹はどんな気持ちで見ていたのだろう。

父に対する絶望? 大人って不潔! てゆーかパパとママこんな事する



の!? ……今となっては知る由もない。

それ以来俺は、父のビデオを隠れてよく見ていたのだが、ある日その現場を妹に見られた。扉が開いた瞬間にデッキの停止ボタンを押したが間に合わず……。

その時の妹の顔。まだはっきりと覚えている。最低なものを見る眼差し。無慈悲な面構え……。

妹はひと言、「お母さんに言うからね」。俺は俺で狂ったように「言ったらぶっ殺す!」と叫び、取っ組み合いの喧嘩になった。

子どもの頃、よく喧嘩したけど一番覚えているのがこの喧嘩。

印象に残っているほかの喧嘩や思い出も見事に「性」にまつわることばかり。今となっては笑える話ではあるが、さすがに妹に、「あの時ビデオ見てどんな気持ちだった?」とは酒が入っても聞けない。

※『死ぬのは私ではない』パンフレットより  
〈きょうだい〉



安田惣一

Souichi Yasuda

## まんざらでもない

劇団に再入団して、はや1年。この1年で急に「綾〇剛に似てますね」と言われるようになった。自分では似てるとは全然思わない。本当に思っていない。けど、今を時めくイケメン俳優に似ていると言われて悪い気はしない。でもドヤ顔で「おれ～綾〇剛に似てるって言われるんスよ～」とは言わない。そんなことを言えば、明日から背中に気をつけなければならなくなる。

だから「綾野〇さんに似てますね」と言われたら、「そんなことないですよ～」と否定はしつつ、まんざらでもない感じを出し、一人ニヤニヤと嬉しさを囁みしめる。

そんな新婚30歳。これからもっと僕を笑顔にしてください。

※『死に顔ピース』パンフレットより  
〈私の笑顔の素〉

## ともぞう

『ちびまる子ちゃん』に出てくる祖父「友蔵」が理想の老後の生活スタイル。日がな一日老人会へ行き、孫のわがままを聞き、婆さんに怒られる。肩身は狭いが、心は広い。ちなみに友達も多い。

孫は驚くほどわがままだが、目に入れても痛くないらしい。婆さんは怒ると怖い、なんだかんだで二人でよくデートをする。

孤独死とは縁遠い友蔵だ。きっと病気をするとわがままな孫は心配し、小うるさい婆さんは生姜湯でも作って、ろくでもない息子は車を病院に走らせてくれるだろう。それが友蔵の老後である。

さて、僕の老後はどうなるだろうか？

理想を現実にするために今日も一日『ちびまる子ちゃん』を観る。そう、友蔵になるために。

※『ピーイング・アライブ』パンフレットより  
〈老後の夢〉

## 「蓋」

福島第一原発の事故から4年、恥ずかしいことに放射能への恐怖も、被災者への想いも忘れてしまっていた。日々の生活に追われ、自分のことしか考えていなかった。

あの爆発の直後は、「日本はとんでもないことになるんじゃないか」と、言い知れぬ不安が心の中にあったのに。

改めてあの日以降のことを考える。するとあの時の不安が蘇る。あの時の気持ちのまま。

忘れていたわけではなかった。見ないようにずっと蓋をしていた。きっとこの不安はこの先どうあっても拭い去れない。だから向きあう。自分の立ち位置からこの出来事を考えることはできるはずだから。

でも事故映像を見た時、不安のほかに、「この国から本当にゴジラが誕生するんじゃないか?」と一瞬本気で考えたことには、固く蓋をしたい。

※『イチエフ・プレイズ』パンフレットより  
〈「あの日」以降…〉

## 今の自分の原動力

ここ1、2年前から、自信がなくなったとき、不安なとき、思い出す言葉があります。

「才能がないからやる、という選択肢があってもいいじゃないか。いつか、面白いものを創り出せたら、才能のない、俺の勝ちだ」

歌手、俳優、エッセイスト。多彩な顔を持つ星野源さんのエッセイにあった言葉です。

周りから何を言われても、自分のやりたいことをやる。やり抜く。

この先、どんなに道のりが険しくても頑張れるような気がしました。そんな言葉を胸に、久しぶりのワンツーワークス公演、楽しんでいきます。

※『誰も見たことのない場所2015』パンフレットより  
〈勇気づけられた言葉〉

## ピアノ

お風呂にはいつている時。その時が僕のパラダイスです。

ちょっと熱めのお湯に長くゆっくりつかる……だけでもいいんですが、それだけじゃありません。

いろいろな妄想にふけるんです。

好きな小説、漫画や映画の世界に、勝手に自分が登場人物として入り込みます。そして新たに別の物語を創るんです。

それを考えている時がすごく楽しい。妄想の中で、僕は光る剣と不思議な力を駆使して銀河を十回程救いました。

7つの玉を探す旅に何回も行きました。今は魔法学校に通う主人公達と共に悪の魔法使いに戦いを挑んでいます。

他にも数多くの物語を妄想していますが、不思議とお風呂の時以外は、この楽しい妄想ができません。本当、お風呂は僕にとって一人で楽しく過ごせるパラダイスなのです。

ただ長風呂になることが多いので、つかりすぎて上がるときに頭がフラフラします。

パラダイスに居続けるのも楽じゃありませんね。

※『蠅の王』パンフレットより

〈私のパラダイス〉

## バカはバカなりにバカな悩みを抱えている

未成年の頃は何事にもさほど興味を持たない人間でした。一応、興味は湧くんですね。でも深く知りたいとは思いませんでした。そんなに物事を深く考えることをしない性格でしたし。

好きなバンドができて、ライブにまで行きたいとは思わない。面白いドラマがあっても、次の回には見たいと思わなくなる。今考えると、なぜあそこまで物事に興味がなくなるんだろうと思うくらい、すぐに熱が冷めていました。

そんな僕でも10代で出会った芝居だけは冷めずに続いています。たとえ誰かに罵詈雑言を浴びせられようとも、芝居だけは興味が尽きることなく続いてるんです。やっと出会えた、興味を持って熱中できること! ……でもでも、このところ毎日のように演出家に言われます。「もっと他人に興味を持てよ」「もっと深く考えろよ」

……僕は未成年の頃から変わっていないのでしょうか?

※『眠れる森の死体』パンフレットより

〈未成年〉

## なんだかんだ言っても一番嬉しく思っているのは絶対俺

2歳年上の姉がいる。今はすごく仲がいいが、小さい頃はよく喧嘩をした。

その頃、自分はまだ体も小柄で、姉のほうが力が強かった。頬をちぎれんばかりにつねられたり、みぞおちにリアットをおみまいされたり。あ、ベッドと壁の隙間に押し込められて、身動きとれない状態で絵の具の筆で顔をくすぐられたこともあったな。

そんな姉も来月結婚します。弟は嬉しい。本当に嬉しい。「お前は40後半まで結婚できねえよ!」とか言ってごめんね。

弟は姉ちゃんを見くびってました。姉ちゃんはずごいよ。結婚式で『butterfly』全力で歌ってやんよ。キャンキューセレブレイト! テントウ虫もサンバで踊り出すぜ! ご祝儀の管理は俺に任せろ。幸せになるんよ。本当におめでと。

※『死ぬのは私ではない』パンフレットより  
〈きょうだい〉



**増田和**

Ai Masuda

## 活字中毒ならぬ……

我が家の本棚は漫画本で埋め尽くされている。

漫画を初めて買ってもらったのは、幼稚園のとき。伯父に連れられて近所の古本屋さんに行った。選んだのは『Dr.スランプ』を一冊。それを夢中になって読んだ。

思えばここから私の漫画好きは始まったのかもしれない。『ベルサイユのばら』などの古い漫画も夢中で読んだ。おかげで高校の世界史はフランス革命のところだけでも良い成績だった。いまだに年に一回は『スラムダンク』を一気読みするし、枕元には少女漫画が何冊も置いてある。というか、読みたい! と思ったら手元にないと落ち着かないのだ。そしてどんどん増える漫画たち。あと忘れちゃいけないのが、毎週買っている「少年ジャンプ」。

※『パラサイトパラダイス』パンフレットより  
〈私が依存しているモノ・コト・ヒト〉

## あたたかな記憶

食べることが好きだ。おいしいものを食べると、自然と笑顔がこぼれる。

私の母方の祖父は和菓子職人で、「けいらん巻」というお菓子を作っていた。卵と小麦粉と砂糖を混ぜた生地を薄く焼き、そこに砂糖と水飴でできた芯を入れて、熱いうちにクルクルと手で巻いていく。端をきれいに切りそろえたら出来上がり。私はこのお菓子が大好きで、遊びに行くといつも祖母が「持って行きな」とお土産にしてくれるのだ。祖父が亡くなってからは祖母と伯父がお付き合いのある方からの注文のみお受けして続けていたが、祖母も亡くなり、今はもうやめてしまった。本当に素朴なお菓子だったが、そこには祖父母の笑顔の記憶が詰まっている。

※『死に顔ピース』パンフレットより  
〈私の笑顔の素〉

## ルーツ

「老後の夢は?」と問われ、どんな風に生きていかを考えた。まず思ったのは両親のこと。父は自営業、母は専業主婦。バリバリ職人気質の父と、普段は穏やかなのに、いざというときは頼りになる母。思えば、両親がケンカしている姿なんて一度も見ることがない。何だかんだ言いながら、とても仲の良い夫婦だと思う。私の知らない苦労もきつとたくさんあったと思うが、そんなことは微塵も感じたことがないぐらい、いつも前向きな家庭だった。

高校生の時、進路のことで祖父から「就職しなさい」と言われたことがある。私は専門学校に行きたいという思いがあり、両親に正直に打ち明けた。すると母はきっぱりと、「自分の好きなようにしなさい」と言ってくれ、父も「心配しなくていい」と背中を押してくれた。

私も、誰かの背中を押してあげられるようなそんな歳の重ね方をしたい。これが私の「老後の夢」と言えるのかもしれない。二人のように、よきパートナーと巡り会えたら最高だ!

※『ヒーイング・アライブ』パンフレットより  
〈老後の夢〉

## 貫いたんだあ～

小学校の同窓会にて。同窓会と言っても、当時仲のよかったメンバーと、担任の先生を交えての飲み会で、たぶん25歳ぐらいだったと思う。本当に久しぶりに会う面々も多く、それぞれの近況を報告。何の仕事をしてるとか、結婚したなんてことを聞きながら、焦りや不安に駆られた。

「……私は今、劇団に入って芝居やってます」と言うと、「そっかあ、貫いたんだあ～」と、先生は笑顔で言った。昔から芝居が好きで、そればかりだった自分を思い出す。

先生はそれしか言わなかったけど、そっと背中を支えてくれた気がした。私は不器用だから一つのことしかできないけど、今も貫いています、先生。

※『誰も見たことのない場所2015』パンフレットより  
〈勇気づけられた言葉〉

## おじいちゃんのパズル

玄関を開けると、靴箱の上には大きなパズルがあった。私がまだ中学生の頃に、祖父が思い立って始めたものだ。祖父はとても行動的な人で、80

歳を過ぎても自転車でふらっと出掛け、昼日中に浅草で寿司と酒を嗜み、巣鴨に行っては大福を買って帰るような人だった。

そんな祖父が思い立って始めたのがパズル。今までやったこともなかったのに、手先が器用だったのと、職人気質で凝りだしたらトコトンな性格に合っていたのか、いつの間にか家の至るところに飾られた。飾りきれずに褒めてくれた人にあげたりもしていた。もらった人、困っただろうに。

祖父が亡くなって、しばらくはそのまま飾られていたパズルたちも、ひとつを残して全部処分してしまった。居間に残った一番大きな祖父お気に入りのパズル。数は減ってしまったけど、たくさんの思い出が詰まっている。

※『海のとっぺん』パンフレットより  
〈私の家〉

## 向き合うということ

小学校5・6年の担任教師は、絵に描いたような熱血先生だった。

ある日のホームルーム。いじめの話になった。クラスで人気者のバスケット部Fくん。当時『スラムダンク』が流行っていて、彼を「ゴリ」と呼ぶ友達がいた。でもFくんはそれが本当に嫌だったのだ。すると先生はFくんに、「一緒にお願いしよう」と言った。先生はFくんと二人、皆の前で土下座して、「もうゴリって呼ばないでください」と、何度も何度も、最後には泣きながらお願いしていた。

このやり方がよかったのかはわからない。先生が叱って終わらせることもできたと思う。でも先生はいつも、私たちと一緒に目線でいてくれた。大人が真剣に向き合ってくれる姿を、私は初めて見た。

今の私はそんな大人になれているだろうか？ 何かに迷ったときにはいつも先生の真っ直ぐな姿を思い出す。

※『毒舌と正義』パンフレットより  
〈忘れられない先生〉

## 備えあれば？

私はいつも荷物が多い。何がそんなに必要なのかと言われることもしばしばだ。だが仕方がない。怪我したら困るから絆創膏、間もなく花粉の季節だから目薬、突然の咳・頭痛に常備薬、はさみ・のり・セロハンテープの文房具類も持ち歩く。稽古予定表や年間予定表、チラシは必須。今回は再演だから、初演の台本も持っていく。だから台本は2冊。紙媒体は重い仕方がない。さらには、何かあったときにと、コンビニ袋が入っている



こともしばしば……。カバンが大きければそれだけ荷物はいつもいっぱいになる。そしてだんだん増える荷物に嫌気がさし、きっと今日はなくても大丈夫! と持って行かない日に限って、それらはいつも必要になるのだ。

結局のところ、備えたつもりで何も備えられていないことに気づく。ああ、カバンも、頭も、身体も、もっとスマートに生きられたらどんなによいだろうか……。

※『流れゆく庭あるいは方舟』パンフレットより  
〈私の備えていること〉

## 雷

たぶんあれは、小学校低学年頃だったと思う。夏休みの家族旅行で、長野の高原に行った。ケーブルカーでけっこうな高さまで登って、さらに歩く。私は兄や大人たちについていけず疲れてしまい、途中から祖父と2人でゆっくり向かうことにした。

ほど良い風。緑に囲まれ澄んだ空気。それをのんびり満喫していたとき、突然の稲光。気づけば大雨と雷。ビショビショになりながらも、雨宿りもどきができそうな大きな葉っぱを見つける。すると祖父は私を残し、「先に行った家族が大丈夫かちょっとそこまで見てくる」と走っていった。

たいした時間でも距離でもなかったろうが、ひとり雷雨のなか待った数分間は本当に怖かった。「きっと私、このまま取り残されて、雷にうたれて死んじゃうんだ!」。祖父に待っているように言われたのに怖くなって、雨の中を追いかけたっけ。

今では、雷なんてっ、と鼻で笑えてしまう、可愛さの欠片もない自分が怖い。

※『恐怖が始まる』パンフレットより  
〈私の恐怖体験〉

## 憎まれっ子、世にはばかる

我が家は、私が産まれるまでずっと男系家族だった。で、いざ私が産まれたら、女の子。特に祖母は、男の子が産まれると思いきんでいたから、それは戸惑っていたそうだ。女の子だと、いろいろ大変だ! と思っていたらしい。例えば、七五三で着物を着せられなかったら? とか、成人式では着物を仕立ててあげないと、とか、果ては結婚のことまでも考えたそう

な。おかげで、とっても甘やかされて育つたと自負している。  
だが、そんな家族の願いもむなしく、4歳の時には、せっかく伸ばしていた髪を自分で切ってショートにしてしまったり、兄たちの真似をして椅子からピョンピョン飛び降りて、机に頭をぶつけ、大流血したり……。わがままたっぷり、やんちゃな娘となりました……。

そんな私も、今や30歳目前。親としては、結婚とか、いろいろ考えるようですが、まだまだ好き勝手させていただいています。家族に感謝。孫の顔は、……もうしばらくお預けで!

※『産まれた理由』パンフレットより  
〈私の産まれた日〉

## 自業自得、か?

バーゲン、と聞けば、みんな我先にと買い物に出掛けるだろう。

だが、私には関係ない。バーゲンには、私が着られるサイズの服も靴も売ってはいない。チビでデブの私には、体に合う服など皆無なのだ。

ならば通販で買えばいいじゃないか! と思うかもしれないが、小心者な私は、たとえ返品ができたとしても、実物を見てからでないと思えない。

だが公演があると、それに合わせて服を買わなければならない。衣装さん泣かせな体型である。なので、自前で揃えることが多い。とにかく着られるサイズを探し、ひたすら町を歩く。「あー、ここは大きいサイズは扱っていない」「うーん、ここは金額が……」。これを何軒も繰り返して、やっとの思いでよいものを見つけたら私の勝利だ!

従って、普段は専ら、ジーパン、Tシャツ、スニーカーである。

ならば痩せればいいのか、と思うだろうが、私にその気は毛頭ない。

『みんな豚になるーあるいは「蠅の王」』パンフレットより  
〈私の闘い〉

## 漢の?ロマン

昨年、お台場に1/1スケールのガンダムが降り立った。

その凛々しい立ち姿に、気がつけば、携帯カメラだけでも65枚もの写真と動画を撮っていた私。

足元を通過する列に並び、ドキドキしながら通ったなあ。  
間近で見た細部の作りは本当に素晴らしかった。  
ガンダムは漢のロマン、と言うけれど、女だって大好きなのだ。  
戦闘シーンの美しさもさることながら、そこにある人間ドラマに涙したこと  
は幾度か。

出来ることならガンダムに乗って宇宙を飛び回りたい!  
1/1ガンダムのコクピットからの眺めはどれだけ素晴らしいことだろう。  
コクピットで主人公たちは何を思い、何を感じたのか。  
そこには想像も出来ないパラダイスがあるのではないだろうか?  
少しでも知ることが出来たらなあ。  
そう思い、今日もひとりDVDをみる私なのだった。

※『蠅の王』パンフレットより  
〈私のパラダイス〉

## 暗黒時代

私の卒業した中学は当時、区の中でもっとも危ないと評判の学校だった。

用務員のおじさんが歩いているところ目がけて、3階の窓から牛乳瓶を落とす。トイレの換気扇が燃えあがる。授業中にバイクで校庭に乱入して走り回ってた奴もいた。あと、煙草を吸いながら授業妨害に来た生徒を教師が馬乗りになって殴る。

こんな光景、マンガ以外で見たの初めて……。

これが私の中学時代。

この話をすると大抵の人に、「マジでっ? ビーバップじゃん!」とか言われますが、至って普通に生活してましたよ、私は。

思えばあの頃から「マジメーず」だったなあ。

戻れるなら「もうちょっとハメはずしていいよ」と言ってあげたい。若さゆえにできることってあるもんね。

あんなバカやってた連中も、今ではいい父ちゃん、母ちゃんやっています。子育てしながら、当時の自分を懐かしんでるようです。

私はというと、未だにハメをはずせず、独身です。

誰か私にいい男、紹介してください!

※『眠れる森の死体』パンフレットより  
〈未成年〉

## 因果は巡る

うちは兄・兄・私の三人兄弟。

あるとき自分や兄たちを見て、ふと思った。「うちってみんな、ぽっちゃりだなあ。親もそうだし、家系的なものかなあ〜」

先日、たまたま昔のアルバムを見る機会があった。

旅行の写真から家のなかの何げない写真までいろいろあった。

ふと気づく。……あれ？ どの写真を見ても私、食べ物持ってる？

そう思ってもう一度アルバムを見直すと、私だけじゃなく、兄たちもすっかりとお菓子やら、ご飯やらを持っていた。

ああ、これぞ因果応報？

今さら悔やんでも仕方ない！この際だからモリモリ食べて、「だんご三兄弟」を目指そう。

そう思ってアルバムを見ている今も、気づけば手にせんべいを持っている私であった……。

※『死ぬのは私ではない』パンフレットより

〈きょうだい〉



原田佳世子  
Kayoko Harada

## お出かけの友

私が依存してるのはネットの「乗り換え案内」のページ。電車の出発駅と到着駅を入れて時刻や乗り換えを調べるあれです。

思い起こせば上京した春、新調した手帳の付録の東京の路線図を見て驚愕した私。名古屋の路線図はほんの数本しか線がなかったのに、東京のはどっちかという線しかない! 複雑な網目模様で圧倒されて、ボタンと手帳を閉じて現実逃避したのを覚えています。

それ以来の「乗り換え案内」ページヘビーユーザー。東京暮らしに慣れた今もう、どこへ行くにも頼りっぱなし。昔はぶ厚い雑誌のような時刻表を駆使して1日に6回とかの乗り継ぎを平気で調べて、鈍行列車の長距離貧乏旅行をしていた人だったのに。あ、貧乏はそのままですが、はい。

※『パラサイトパラダイス』パンフレットより  
〈私が依存しているモノ・コト・ヒト〉

## 色

笑顔の素、私の場合は「色」がその一つでしょうか。恋とか艶っぽい方の意味じゃないですよ。ま、最近そういう方面の沙汰がなさすぎなので、そんなことの一つや二つ訪れたあかつきにはニヤニヤしっぱなしになるのは間違いないですが。話を戻して(笑)、例えば某衣料品店でバイト中、棚に何十色も並んだ無地のカラーソックスを見るだけでなんとも嬉しくなります。色というもの自体が好きなので単体でもいいのですが、互いに引き立つような「色あわせ」を見ると、よりウキウキします。夕焼け空のオレンジと青のコントラストや、その間の微妙なグラデーション!! ひとりの部屋で寂しく眺めているだけで笑顔になります……残念!!(笑)

※『死に顔ピース』パンフレットより  
〈私の笑顔の素〉

## 夢のためには……

老後には、是非犬を飼いたいなあと思います。黒の豆柴とか、いいなあ～。黒い毛が密で、目の上に白い「まる眉毛」があって、巻き尾をプリプリさせながら歩くかわいい黒豆柴。その子と縁側で日向ぼっこしながらお話しするんです。ああ、絶対かわいい! 絶対幸せ!

そのためにはまず一緒に暮らせる家を手に入れて、それにある程度の経済力も手に入れたい! ワンコはいざ病気になったときに保険が効かないし、毎日のエサ代も馬鹿になりません。さらには、毎日一緒に散歩もしたいので私の体力もいります。

という事は、私の老後の夢とは「裕福で健康」でありたいということか(笑)?? よし、目指せセレブでアクティブなお婆ちゃん!!

※『ピーイング・アライブ』パンフレットより  
〈老後の夢〉

## ショック再び

あの事故直後、「東京の水も危ないらしい」という噂を聞いた両親が、名古屋から浄水器の新しいフィルターを送ってきた。「それでもなるべく水道水は飲むな」、そう言われた。

その後、私は事故の約1年後に『ジレンマジレンマ』の初演を観て、ワンツークラスに入団。浄水器は入団後に引っ越した今の家でも使っているけど、あの時水道水を使うたびに感じたもやもやした不安はもうなくなっていた。

先日、福島第一原発近くの村に行く機会があった。まだ人が住む事を許されていないその村は、家々はそのままで空っぽで、あちこちで作業車が汚染土を削り続けていた。怖かったのは五感には何も危険を感じられなかったこと。痛くも痒くもなかった。4年目の今、その不気味さと解決の程遠いことに改めてショックを受けている。

※『イチエフ・プレイズ』パンフレットより  
〈「あの日」以降…〉

## うまくいかないときに

「うまくいかないと思うとき、その人は伸びている」

自慢じゃないが落ち込むのは得意だ。けして明るく前向きな人間ではな

い。うまくいかないことがあると、人前でも平気でため息をつき、夜バスタブにつかりながら「今日も私は完璧にできなかった、私はなんて欠けているんだー!」と嘆く。理想の自分を思い慕うという意味で、かなりナルシスティックな面倒くさい人間だと思う(笑)。

そんな思考スタイルの私になっているとき、ふと、この言葉を思い出す。それが当てはまっているかどうかはわからんが、もしかしたら今自分はちょっとよくなってる最中かもしれない♪ えへへ。うん、そういうことにして今夜はとりあえず寝てしまおう! かくして今日も私は健全に、トライしては失敗しつつ生きている。

※『誰も見たことのない場所2015』パンフレットより  
〈勇気づけられた言葉〉

## 生き物屋敷

私の実家は田舎にあり、庭には生い茂るように木が生えています。そしてたくさんの生き物が訪れます。雀はもちろん、梅の木にメジロが来たり、藤棚に鳩が巣を作って子育てしたり。夏には池にアマ、ヒキ、トノサマとカエルが揃い、夜になると周りの田んぼのカエルと一緒にっての大合唱が聞こえます。ヤモリが窓ガラスを走っていき、カゲロウが網戸にとまり、たまに屋根裏部屋の窓の端に小さなコウモリが逆さになって寝ていました。最近庭に蟬穴と抜け殻を多く見かけるので、蟬もたくさん巣立っているようです。その庭に飼っている犬たちがいて、チャボがいます。さらに父が何でも拾ってくるので、猫やら巣から落ちた3羽の子ガラスやらが突然増えたりして生き物がいっぱい。それに比べて今、私のアパートにはベランダに鉢植えのミントが一つあるだけ。やっぱりちょっと寂しいなあ。

※『海のとっぺん』パンフレットより  
〈私の家〉

## 一番身近な先生たち

私の父は絵の先生をしていました。母も家の2階で簡単な工作教室を開いていて、その時は先生と呼ばれていました。でも私は二人から絵の技術的なことを教わった事はほぼありません。ただ、いつでも自由に描かせてくれたし、物心つく前から美術館にいっぱい連れて行ってきてました。小さい頃は静かにしているのが退屈で、絵なんかろくに見ずに弟と走り回っていましたが……。

ある時、美術館で作家のパレットが展示されていました。父は、「その

人がずっと使っていたパレットが、その人のどの作品より一番素敵だったりすること、よくあるんだよ」。そう言っていました。

意味のとり方はいろいろあると思いますが、私は過程の肯定として捉えています。その時その時その人が作品に向かっていったこと、その積み重ね自体が美しい。今を生きることの勇気を教えてもらっていた気がします。

※『毒舌と正義』パンフレットより  
〈忘れられない先生〉

## ワクワクして備える

昔、自転車で長旅をしていた時の習慣で、旅行の時は宿の中で荷物をあまり広げないようにしている。バッグから必要なものだけを取り出し、なるべく取り出したそのバッグの上などに置くと決め、ベッドや畳の上などに無制限に広げない。そのほうが次の日の朝早く出発できるからだ。早く出発すれば、計画していなかった絶景ポイントを見つけても時間が取れる。地元の人と出会ってサトウキビを刈らせてもらったりなんかしたこともある。綺麗な浜で海に飛び込んでみてもいい。どうせ次の宿まで走る間に服は乾いていく。そう、旅している時の私はステキな出会いに備えてるのだ!

……しかしなぜ普段の私は、気づくと物が広がり放題の部屋で毎日ドタバタの朝を迎えているのだろうか? 稽古場や楽屋で「あれ無い、これ無い」とウロウロしてるのはなぜ? まあ、出会いには結局恵まれているようなのでヨシとする、か?!

※『流れゆく庭あるいは方舟』パンフレットより  
〈私の備えていること〉

## コーヒー事件

私が小学校1年のある日、家に母のお客さんが数人来て、しばし談笑して帰っていきました。残ったのは普段見ない綺麗で華奢なカップとその中の珈琲。その頃私は「子どもはコーヒー飲んだら大きくなれない」と言われて飲んだことなかったのですが、その日そのカップの珈琲がとても美味しそうに見えて、こっそり、ひと口飲んだのです。そしたらその美味しいこと! 甘くてクリーミーで……怒られると思いつつも私は残りを全部飲んだのですが、見送りから帰ってきた母にすぐバレました。「あんた



飲んだでしょ?」。ギクッ!「知らないよ、佳世はもう一生背伸びないよ。ガーン!!「いやだ、いやだ!ごめんなさい」。でも母は知らんぷりです。怖くて怖くて、外に飛び出し、「神様もうしません。だから私をおつきして下さい!」と電信柱の上あたりのお空に泣きながらお願いしました。

今じゃ身長は楽に平均以上、珈琲はブラックでがらがん飲む大人になりました。

あん時は怖かったな。

※『恐怖が始まる』パンフレットより  
〈私の恐怖体験〉

## 自転車

私にとっての旅のパートナーと言えば自転車です。荷物を自転車に積んで、見知らぬ土地を何日も旅するのが好きなのです。サブパートナーとして地図と合羽があれば無敵。どこまでも行ける気がしてきます。学生の頃、旅仕様の青い自転車でいろんなところへ行きました。

沖縄ではふと入った小路で、巨大なアロエの葉っぱをたくさんカゴに入れているおじいちゃんに出会いました。おじいちゃんはその場でアロエをむいて、中身を刺身として食べさせてくれました。「このアロエ全部食べるの?」と聞くと、「DH●に出荷する」とおじいちゃんは答えました。

北海道では、道端からガサッと音がしたと思ったら熊がひよいと現れたので、「ぎゃあ」と叫んで必死にペダルを漕いで逃げました。まあ、熊は私の声で私以上に驚いたらしく、秒速で草むらに消えたので追いかけるのはしませんでした……。

私にとって自転車は、一緒だと旅が何倍も楽しくなる相棒なのです。

※『奇妙旅行』パンフレットより  
〈旅のパートナー〉

## ある寒い日に。

私が生まれた日は冬、2月の18日。母は初産で相当痛かったらしい。私は3020gと平均的な体重だったのに、新生児室に並べられた赤ちゃんの中で、頭がほかの子よりダントツに大きかったらしく、母はそれを見たとき「同じ重さなのに損した!」と思ったと、電話越しにケラケラ笑っていた。あと、「おでこ」まで毛がいっぱい生えてたらしい!? 抜けてくれてほんとに良かった。

父親はそのとき、仕事で外国だった。「うん、いなかったよ。帰ってきたらモニョモニョって、何か変なのがいた(笑)」。そんな自由な父がモニョモニョの頃の私を版画にしたものが、ボロボロだが今も実家にある。今、私はその当時の父の年齢に迫ろうとしている。

24歳の母は、その日、一人で分娩室にいた。私は未だにワンルームに一人である。人生色々☆。お産も、親も色々。そしてやっぱり、命は不思議。

何はともあれ、お父さん、お母さん、産み、そして育ててくれて、ありがとう!

※『産まれた理由』パンフレットより  
〈私の産まれた日〉



## 小山広寿

Hiroto Koyama

### シュワツと爽快、そいつの名前は

4年ほど前、私が専門学校で1年目の頃、ある飲み物を好む友人がいました。彼は私に「最高やで」「小山さんも飲んでみ」と勧めてくる。その後どうなるかも知らず飲んでしまった私。それを飲んだその刹那……口内に甘くシュワツと弾ける炭酸。食道を通り抜け胃の中へ流れる冷たいカラメル色の液体。そして脳へと与えられる快楽物質。

私は一瞬にしてそいつの虜にされたのです。

それ以来、一日の終わりにには500mlの缶を1本。自分へのご褒美のときにはもう1本と、止められません。「骨が溶ける」とかいろいろ言われますが、たまになら大丈夫。癒しをくれる素敵な飲み物です。たまには飲んでみてください。とっても美味しいんですよ。「コカ・コーラ」

※『パラサイトパラダイス』パンフレットより  
〈私が依存しているモノ・コト・ヒト〉

### 気兼ねのない友達

専門学校にいた頃に出会った友達がいます。今でもちよこちよ一緒に遊んだり、家に突然お邪魔したり、お酒を飲んだり……。なんだかんだで6年くらいの付き合いになります。同世代ということもあってお互いに気を遣うこともなく、くだらない下ネタを連発し合ったり、将来のことを真剣に相談し合ったり、一緒にいると「いい奴に会えたなあ」と嬉しくなります。

ただ、年を重ねるにつれて会う頻度も低くなり、なかなか会えない期間のほうが長くなってしまっているのですが、そのぶん次に会ったら友達からどんな話が飛び出すのか、自分はどんな話をしようかと思うと楽しみで、それを考えるだけで笑顔になれます。

※『死に顔ピース』パンフレットより  
〈私の笑顔の素〉

## 引きこもらない人生を

どうも老後の事は分かりません……というのも、あまりにも自分に問題がありすぎて、「老後のことへうつつを抜かす前に、己はまず、今この現状をなんとか打開せい!」と、毎日毎日発破をかけつつ、やっと生活しているような有り様だからです。そんな日々なので先のことを考えるより、「今、この場で自分ができることを続けていくのが一番いいだろうな」と、そんなふうにするのです。僕は、旅行とか修行とか恋愛とか何でもかんでも、「行こう」「やろう」と思ったらすぐに行動できる、自分に素直な自分になりたい。この先の人生、素直に見て、聞いて、感じて、いくら歳を重ねても自分の足で歩ける限りはどこまでも歩く。歩き続けていたい。それが夢です。どれだけ老いても、死ぬまでも。

※『ピーイング・アライブ』パンフレットより  
(老後の夢)

## ゴーイング

「心そのままに行け、最後にはきつとうまくいく」

ボブ・ディランの『Going, Going, Gone』という曲の一部です。

僕はすごく優柔不断で、いつも、どうしよう……どうすればいいだろう、ってなっていたんですよね。何をすることもなんか恐くて、考えすぎて、結局動けなかったってことがたくさんあって、なんであの時にやれなかったんだ、なんて思ったことをすぐにできないんだあーって。

でも、この歌詞を知ったとき、視界が広がった気がして、「とりあえず今やっていることを心そのままにやろう——きっと上手くいくから」と、素直に思うことができました。

この言葉は、自分の背中を後押ししてくれて、一歩前に進むための勇気を与えてくれます。

※『誰も見たことのない場所2015』パンフレットより  
(勇気づけられた言葉)

## 森山 景

Kei Moriyama

### せんせい

せんせい、と呼んでいる友達があります。スーツで大学に来るのは塾講師のバイトをしているからです。音楽に詳しくて、歩くときにはいつもイヤホンをしています。

せんせいを思い出すと気持ちが明るくなります。学校や道で偶然会うだけでも元気が出ます。今回改めて考えると「別れ際」に理由がある気がしました。急いでいるときも、別の誰かがいるときも、さよならのあいさつが流れることはありません。胸の前あたりに片手を挙げ、こちらを見ながら「じゃあ」「またね」と言います。その仕草だけでも、ちょっと面白いし、真面目な人だなと思います。せんせいに会って別れるたびに、笑いたくなります。私の笑顔の素です。

※『死に顔ピース』パンフレットより  
〈私の笑顔の素〉

### ベッポじいさん

老後、というか老人という言葉聞いて、エンデ作『モモ』に登場する「ベッポじいさん」が浮かびました。高校生の頃、友人に「無口で掃除を頑張るところが似ている」と言われたからだと思います。それと、老後というのは年齢の問題というよりも時間の問題だと思うからです。しかし先頃、改めて『モモ』を読んでもみると、ベッポじいさんとわたしはまったく似ていませんでした。

私の老後の夢はベッポじいさんです。ベッポじいさんは毎日毎日気が遠くなるほどの長い道路を掃き続けます。ベッポじいさんの無口とは、言葉を探す時間です。何も考えない脳みそを叱咤して、皺を増やして、身体で汗をかいていきたいです。

※『ピーイング・アライブ』パンフレットより  
〈老後の夢〉